



資料 : 神戸大学ESD 国際シンポ基調報告集

ピノー, G
ラニ=ベル, M
ビール, N
末本, 誠(翻訳)

(Citation)

神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 5(1):155-168

(Issue Date)

2011-09

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81003447>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81003447>



資料：神戸大学 ESD 国際シンポジウム基調報告集

Archives: Keynote addresses for the International Symposiums
on ESD at Kobe University.

G. ピノー* M. ラニ＝ベル** N. ビール*** (翻訳) 末本 誠****
Gaston PINEAU* Martine LANI＝Bayle** Nadia BIRE*** Makoto SUEMOTO****

要約：2010年1月と2011年3月に、神戸大学発達科学部で開かれた ESD に関する国際シンポジウムでは、フランスからライフヒストリーの研究者を招いて、大学教育における ESD カリキュラムの開発を目的にした討議が行われた。ともに ESD の特質である価値観や生活態度の変化という教育的効果に迫る方法論を探究することを目指したものであった。ガストン・ピノーは、マルティン・ブーバーの「関係世界」の議論を基に、地球規模の人類倫理を再構築するためには、精神性という課題に改めて目を向ける必要があることを指摘した。マルチヌ・ラニ＝ベルは、持続可能な未来の構築には、過去に目を向ける必要があるとして、ジョルジョ・サンドの『レユニオン島』(1863)をはじめとする先人の言葉を引きながら、一人一人の人間が持続可能な社会づくりに参加する方法が、その経験を語り後続する世代との交流を図るという行為であることを提起した。ナディア・ビールは、ナント大学でライフヒストリーの実践指導に携わっている立場から、ライフヒストリーを学ぶ具体的な方法とその意義や効果について、自らの経験を含めて説明した。

1. 解 説

ここに収録したのは、神戸大学発達科学部の「高等教育 ESD 研究グループ」が、日本学術振興会の科学研究費（挑戦的萌芽研究平成21～22年度）を得て、フランスから招請したトゥール大学名誉教授ガストン・ピノー氏をゲストとして開催した、「心のありようから考える ESD」をテーマとする一回目の「ESD に関する国際シンポジウム」（2010年1月26日）での基調提案と、翌2011年3月9日に開いた、ナント大学のマルチヌ・ラニ＝ベル教授とナディア・ビール講師をゲストとする二回目の国際シンポジウム「HESD（高等教育 ESD）における実践と省察の関係——価値観・態度の変容をめぐる」の基調提案である。

この二回のシンポジウムは、ESD（Education for Sustainable Development：持続可能な開発のための教育）に関する方法論の開発を目指して、ライフヒストリーを具体的な方法論として取り上げ、その可能性を実践＝研究的に探究することを目的に開かれた。ESD では、人々がこれまで身につけてきた、人間中心の生産力拡大を最優先にする価値観の見直しや、便利さを追求する生活態度の変更が課題になる。また自然環境の問題だけでなく、格差

や貧困、飢餓、戦争など、「持続的ならざる」現実に向け、「持続可能な社会」の構築を目指す幅広い視野が求められる。大学教育の中でこの課題に応えるためには、自己を地球的な観点から相対化し他者との相互的な関係の中に位置づける新しい自己理解や、現実を自分の問題として捉える当事者意識の形成、現実的な課題解決に必要なスキルの獲得、そして何らかを為そうとする発意（initiative）の獲得が求められる。神戸大学では、このような課題に応える ESD を創造すべく過去4年間、発達科学部、経済学部、文学部が連携する授業カリキュラムの開発に取り組んできた。来年度からは農学部が加わり、4学部体制での取組みが始まる。このシンポジウムは、このような実践的な取組みと経験の蓄積を基に、さらに新たな展開を目指すべく開催されたものである。

価値観や生活態度の変化は、教育的な取組みにとっては、最も困難な課題に属する。知識やスキルの獲得は比較的容易であっても、人がその内面を変えることは簡単ではない。もちろん、不用意に外からの力でアイデンティティを変えるようなことがあってはならない。本人の自覚や自発的な意思に基づいた変化が生まれるとは、どのようなことか。このような ESD の原理に関わる研究や議論は、いまだ不足しているといわなければならない。そのためこのシンポジウムでは、内面の自覚的な変化に迫る方法論と

* フランス・トゥール大学名誉教授

** フランス・ナント大学教授

*** フランス・ナント大学講師

**** 神戸大学人間発達環境学研究科教授

(2011年4月15日 受付)
(2011年4月16日 受理)

してライフヒストリーに注目したのである。

一回目のシンポジウムで、ガストン・ピノーは、マルティン・ブーバーの「関係世界」の議論を基に、地球規模の人類—倫理を再構築するためには、精神性という課題に改めて目を向ける必要があることを指摘している。これは自己の存在を他者の存在を前提に把握するという、ESD での基本的な立場を自己の関係性論として深めようとしたものといえるだろう。これを受けた二回目のシンポジウムで、マルチヌ・ラニ＝ベルは持続可能な未来の構築には、過去に目を向ける必要があるとして、ジョルジョ・サンドの『レユニオン島』(1863)をはじめとする先人の言葉を引きながら、一人一人の人間が持続可能な社会づくりに参加する方法が、その経験を語り後続する世代との交流を図るという行為であることを提起している。これは彼女の得意とする系譜論的なライフヒストリーの観点を、実践論的に ESD の問題へと広げようとした議論といえる。またナディア・ビールは、ナント大学でライフヒストリーの実践指導に携わっている立場から、ライフヒストリーを学ぶ具体的な方法とその意義や効果について、自らの経験を含めて説明している。実践する立場の報告であり、理論的な説明の背景に実践者としての豊富な経験が存在していることに注意しながら、読む必要があるだろう。

簡単に3人の紹介をしておくと、ガストン・ピノー氏は1939年の生まれ。フランスのトゥール大学名誉教授である。成人教育にライフストーリーを応用する可能性を示した『人生の創造』(1983)で広く知られ、「ライフストーリー成人教育研究国際協議会(ASIHVIF)」の創設メンバーの一人である。著書には、『ライフストーリー』(2000)、『ライフストーリーと伴奏』(2000)、『時間性と形成』(2000)などのライフストーリー関連の著作がある他、『環境教育としての水の連係』(2001)、『地球に棲むこと』(2005)などによって、自己の意味を地球環境との関連で見つめる課題を提起している。

ラニ＝ベル氏は1952年生まれ、現在、フランスのナント大学で、教授として「教育科学」を担当している。臨床心理学の実践・研究者として出発し、現在はナラティヴな方法論を用いた教育臨床学の研究に取り組んでいる。フランス語圏では、系譜論(généalogie)的なライフヒストリー研究で、つとに知られている。本シンポでは、ライフヒストリーをESDの方法とする可能性について、問題提起をしている。著書には、『女から女へ世代を超える——キャロリーヌ・ルボン＝ベルの系譜論的ライフヒストリー』(1997)、『子どもとその歴史』(1999)、『人生の出来事と人間の形成(3巻)』(2006)などがある。

ナディア・ビール氏は1958年生まれ、現在、ナント市内の小学校の教師をしながら、ナント大学で講師としてライフヒストリー研究の指導に当たっている。「学校教師の形成過程——5つの伝記的な道筋についての臨床的研究」で博士号を取得している。

(末本 誠)

〈資料1〉

「ESD——人はどのように自分を変えるのか」

ガストン・ピノー

「持続可能な開発」という表現が生まれたのは今から20年前、1987年の、ユネスコ環境と開発委員会のブルントランド報告「われわれの共通の未来」においてだった。その定義は「将来の世代のニーズを満たす機能を損なうことなく現在のニーズを満たすやり方」という空疎なものであった。だがこの定義にも「開発」と「持続可能性」という二つの用語それぞれについての、世代にまたがる時間的な視野という、きわめて刺激的な探求に突破口を開いたという意味はあった。この突破口が開けられたことによって、地球的な限界として示された人類の新しい政治を具体化するためには、生活の仕方だけでなくものの考え方においても、緊急に変えなければならない事柄がたくさんあることが明らかになった。

「開発という、普遍主義者のものであることが明らかなこの定義は、西洋社会中心主義の典型的な神話を作り出す、度外れて強い西欧化のモーターないしは発展途上にあるものの植民地化の道具ではなかろうか」(モラン 2002 45頁)。現在の幾重もの世界的な危機は、経済成長における発展という半ば統計的な連関の追求によって補強されている。一定の国々での持続可能な発展と、持続不可能なその他多数の未来を同時にひきつれているというのが、この経済成長というものの様相ではないのか。このような問いかけは、社会的、時間的、空間的な次元を結ぶ地点に立ち返りながら、人間形成と地球の未来のエコ政治学的な探求を切り開く地点に至る。」

(ピノー、パシュラール『地球に棲む』2009)

「持続可能性とは何だろうか。維持し再生産すべき安定した状態か、あるいは調整すべき複雑な運動か？こうして立ち現れる持続可能な変化についての学際的で異文化交流的な探求には、生涯教育(formation permanente)あるいはあらゆる人生の時期と領域における学習についての、教育的な省察の始まりに近づくことが必要である。人生が恒久的に共に構築するものになっていけばなるほど、既知のものはしだいしだいに失われていくのである。」(同上)

こうした連絡(communiqué)を成り立たせようとするのは、持続可能な未来と生活的学习の間の一生涯にわたる接近である。それは「持続可能な未来」「学習」「一生涯にわたる」という三つの柱——個人・エコロジー・社会—経済——、つまり人間に関わる領域・自然にかかわる領域・精神的存在という関係世界の三つの領域を結び付けることによって、そのことを推し進めることを目指すのである。

諸組織と社会的環境、物質的環境の間の、複雑で三次元的な関係の世界についての学習は、オギュスタン・ベルク(2000)がそ

の相関文化的な探求によって検討した「人間存在のすみか（オイコス oikos）」と「風土（エクメーネ écumène）」の形成に関するそれと似ている。これらの関係についての学習、ないしはその形成を強調することによって、われわれは「自己」と「他者」そして「物」との間という三心的な関係性において、エコ教育および「すみか」の形成について語ることになるだろう。

1. 形成すべき新しい中心世界：関係世界（le monde relationnel）

「人間存在のすみか（アビタ）」と「風土」の、持続可能な未来という生き生きとした中心をなすこうした関係世界の形成の複雑さは、マルティン・ブーバーの次のような現象学的アプローチから開始された。

「関係の世界をつくっている領域は三つある。

第一は、自然との生活。ここでは関係は言語のきざし（階）にまつわりついている。

第二は、人間との生活。ここでは関係は言語の形をとる。

第三は、精神的存在との生活。ここでは関係は言語によらず沈黙の中にあるが、ここから言語が生まれてくる」（ブーバー、1969、p148、岩波文庫 127～28頁）。

こうした三元的な関係世界の形成についてのアプローチは、「自己を介して」「他者を介して」「物を介して」という、人間形成の三心的な理論へと戻ってくる（ピノー 2000）。空・人・土という儒教の宇宙の三神と同様にである。しかし、これら三つの柱ないしは存在の間の関係に焦点化しつつも、それはさらに——それらを結んだり（reliant）ほごいたり（déliant）、統合したり（unifiant）しなかったり、生かすような（vivifiante）仕方や死なせるような（mortifère）仕方によって——全体としての把握とその意味についての相互作用のプロセスへアプローチすることを可能にする。われわれは、持続可能な未来の構築が求める自分との関係、他者との関係、そして自然との関係の一定の変化を手にするために、トランプの大勝負におけるカードとして自らを賭けよう。

2. 人間間の関係変化

関係が言語によって最も容易に明確化されるのは、人間関係という領域においてである。この領域における諸関係の形成と組織は、歴史の過程で、社会組織に関する探究を社会哲学、政治学、経済学、文化史、社会学、人類学…など様々な形で、大規模かつ正面から動機づけてきたし、またこれからも動機づけるだろう。伝統的には、こうした形成と人間関係の調整についての考察は図式化すれば、対立する二つの極の間を揺れ動いている。

——人間同士の死闘という極。人間は人間にとって狼である。社会組織の規則は規則の中でも最も強い。規則は身体的、経済的、精神的な暴力、戦争を介して現れる。

——この極の力にも関わらず、長く続いた歴史的に偉大なあらゆる文化においては、対抗的な別の極、生き生きとした協力という極が活動している。人間の生活は他者、複数の他者のおかげに

よってしか成り立たない。他者はオオカミではなく似てはいるがはっきりとした違いのある、連絡し（communicante）、協力し（coopérante）、共同体的に（communautaire）感情を共有しさえする（communiant）、生活関係をともに打ち立てるべき存在である。

各人およびすべての者にとって持続可能な未来という共通の賭けは、人類の余命のかかった地球規模の賭けという、社会組織の対立する二つの極性についての歴史的な振り子の根源的に新しい条件である。もし人類が、持続可能な地球規模の共同生活を確約するために、社会－生態学的であると同時に社会－経済的な関係を構築することを学ぶため、互いに連帯することが出来なければ、すべての者は死ぬ。社会－生態学的な組織の、**地球規模の人類－倫理**が構築されるべきなのである。「われわれはもっと幅のある共同体の中で、独自の共同体的倫理の開発と統合を願うことが出来るし、またそうすべきである。『地球－祖国（Terre-Patrie）』というこの共同体は、『友愛（fraternité）』といういまだ実現してはいないが地球規模の人類の運命共同体を通して、またそのせいで必要になっている。この共同体倫理の勝利は、全世界に拡大するはずである。」（モラン 2004、p170）

「気候変動に関する京都議定書」（1997）で合意された概念とその厳密な適用は、構築されるべき地球規模の人類－倫理の国際的な緊急性の中での、最初の歴史的事例の一つである。2005年には、192の独立国のうちの182カ国がこの議定書に署名をした。2009年にはコペンハーゲンでの条約締約国会議が、どれだけの課題が積み残されているかを示すことになる。しかしその成功も挫折も、そろって生活様式を持続可能性に向けて変化させることを、共同で学ぶことによって達成され克服される。

3. 自然との関係変化

環境という物的要素との関係の交渉領域では、「関係は言語のきざしにまつわりついている。」

それは長い間の捉え方として、人間は自然が人間の欲求だけに基づいて自分の意のままにこき使うことのできる、何のためらいもなく開発することが可能であると信じてきたからである。自然との関係はその利用価値だけが示すものとされ、そこから引き出せる以上の経済的利得を得るという価値によって、どうしても増幅されているのである。

幾重もの生態系の危機が指し示しているのは、空気、水、土という基本的で原初的な自然の資源が、無尽蔵ではないということである。濫用するのではなく、使い尽くさないよう節約するのではなく、これらを使うために学ぶこと。それは、それほど簡単ではない。生活の仕方と考え方の革新的な変化、それには普通の使用（usage）関係を賢明な（sage）関係へと変化させなければならない。もはや、毎日の生活の振る舞いを物との関係で意味のない所作として、最終的な影響を考えずに捉えるようなことをしてはならない。影響はそれが及ぶ期間を通じて、それぞれの瞬間および

それらの時間全体の双方で、静かだが深みのある強力な生活のパートナーなのである。

これらの新しい物との関係から、もはや経済的な関係だけではなく生態学的な関係を学ぶための、**環境に対する——環境による環境のための——教育の必要性が増大している**のは、何が原因になっているのだろうか。環境による環境のための、しかし同時に人間のための教育の例として、わたしは1992年にトゥール大学とパリ第8大学を拠点にして組織された、エコ教育研究会（Groupe de Recherche en Ecoformation : GREF）の仕事について触れた。GREFはその活動プログラムとして、空気・水・土・火という伝統的な西欧の宇宙発生論の4つの要素への入門を取り入れている。方法論がしだいにこなれ展開していくうちに、「環境の自伝」という方法論（バシュラール 2009）が、『空気について——エコ教育入門』（ピノー編 1992）、『エコ教育としての水の連係』（ピノー、バシュラール共編 2001）、『地球に棲む——惑星意識のための地球エコ教育』（バシュラール、ピノー、コットゥロー、モニロン共編 2005）という3要素を取り上げた書物となり、成果として公表された。火についての探求は現在進行中である。広島との出会いが予定されている。

4. 思いきって個人関係を精神的存在によって導こう

精神的存在との関係領域に思い切って言及することは、大学での研究会や学問的な訓練の場には不釣り合いで場違いなことに映るかもしれない。社会および自然との相互作用を基にする実際の現代的組織は、確かに原則的には精神的、宗教的な偉大な伝統から距離をとって成立している。野生の産業化の時代である現代は、近代以前のアナクロニズム的で時代遅れの存在様式であるとして、それらを再び投げ出し非合法化している。

しかし現在の危機が、このような現代の初歩的な合理主義の思い上がり揺り動かしている。ポストモダンの時代は、複雑で未知の人間主義からの超出（transhumain）と合理主義からの超出（transrationnel）を考慮に入れることに迫られ、己を知ろうとする。これらを考慮に入れることは、前近代的な宗教的、精神的アイデンティティに関する再生産者、完全主義および原理主義者の内省とは必然的に異なっている。「われわれは二番目の先史時代に居る。地球規模の火の時代のそれ。地球社会の可能性という先史時代。そしていまだに人間精神の先史時代。さらにおそらくは、技術の世紀の先史時代に」（モラン、2001、274頁）。いまだ明らかにされていない「地球社会」という挑戦に直面した人間精神の先史時代において、精神世界または複数の精神世界への接近可能性をはっきりさせるための、果敢な探求が始まっている。この第5回目の神戸大学 ESD シンポジウム「ESD——こころのありようから考える——」は、最先端の重要な事例の一つである。

自然および精神的関係の衝撃についての探求には、「現在」に「過去」と「未来」を接合することが求められるはずである。この探求は簡単ではない。というのは、それは研究者と研究されてき

た事実を一風変わった結び目につなぎとめ、大胆さと謙虚さとともに必要とし、無限に開かれるとともに限定的な反省が求められるという、逆説的な世界を伴って展開しているからである。西田幾多郎によって特別に用いられた中心的な用語を改めて用いるならば、自覚という先導者が、自らそこで跳躍するために必要であるように思える。つまり自己と世界に目覚めること、そのことを通して私は歴史的な生命の世界について語ろうとする。「世界は我々の自覚の中に自らを表現する。それは我々の行為を通して自ら己が形を成す」（西田、黒田 2008、p6 の引用から）のである。

今回の限られたこの出会いの場では、われわれはモランによって拡張理解されたブーバーを拠り所にして、人類領域と生物領域の間のインターフェイス的思惟の領域として、**この精神的存在の世界が優れた関係世界であることを理解する試みをしてみたい**。

この「精神的存在と共にある第3の領域においては、関係は言語によらず沈黙の中にあるが、ここから言語が生まれてくる（p148、翻訳128頁）。…ここでは関係は雲に覆われてみえないが、閃光のごとく自己を啓示している（p23、翻訳12頁）。ブーバーによれば、このようにベールがはがれること、啓示は純粹に実用的な〈われ—それ〉という非個人的な相互関係を、交互的な〈われ—なんじ〉という個人の間の出会いと対話へと変化させる。ポストモダンの合理性によって刈り込まれた原初的なアニミズムが拡張される中で、この啓示は世界を個人化し、隠れていた縁戚関係を明白にし、無制限に拡張可能なものとして関係づける存在と力を確立する。「〈われ—なんじ〉の純粹な関係は、〈それ〉の存在が〈なんじ〉となり得るということ、〈なんじ〉へと高まることによって、聖なる根源語が、すべての存在になりひびき、真の持続の保証が成り立つのである。その結果、人間生活の時間は、充実した現実を成就し、たとえ、〈それ〉の世界との関係をたち切ることができなくとも、人間生活に〈なんじ〉の関係が貫いて働きかけることによって、輝かしい透徹するような恒常性を獲得することができる」（ブーバー 1969、p166、翻訳144～45頁）のである。

形体（forme）から明らかになるのは、精神的関係のこの関係づける力を無制限に延長することができても、それは神秘のままにとどまること、そしてそれはわれわれの手の届かないところにあることである。しかし中間的な形体は、自己解体することによってすっかりその力を失っても、自らを差異化し自らのアイデンティティを確立することを可能にする。「精神的存在としての生活から、普遍妥当の世界である〈思惟（ノエシス）〉の世界を除去することができる」（ブーバー 1969、p149、翻訳128頁）のである。思惟の世界の除去というこの延長と、自律した生活を理念として改めて理解しようとする多数の著者に依拠しながら、モランは理念・言葉・数・思考・概念・理論・イメージ・神話・イデオロギー…などを、彼の名づける思惟領域の中に再整理しつつ、精神に関する別の事柄を探求する。「この領域は環境（milieu）のように、用語の媒介的な意味において、われわれを外界と交流させるために、われわれと外界との間に置かれている。それは人間の知識の導き手としての環境である」（モラン、1991、p114）。自然（生物領域）の中に人間的領域（人類—領域）をはめ込もうとする、ゆるやか

な3領域モデルの構築の中に、彼はこの**二者間のインターフェイスとしての思惟領域**を位置づけるのである。「無知、言葉に尽くせないこと、神秘…との間を関係づけるのが、この思惟領域である」(p123)。電子メディアの爆発は、無限の潜在能力を持つこのバーチャルな思惟領域での半ば無制限の旅と連結 (connections) を可能にすることによって、連絡 (communication) と関係 (relation) の驚くべき可能性を開いている。そこで、精神の時代は開かれるのだろうか。その前—歴史性は終焉するのだろうか。

結論

持続可能な未来の構築は、わたしたちの考えでは、生涯にわたって個人としてまた集団として、自己—社会—生態学的な新しい関係を結び合わせる学習を求めている。短時間のこの大雑把な検討で言いたいことは、このタイプの学習がマクロ・メソ (中間)・ミクロ社会的な様々な次元につながっているということ、つまり気候のガバナンスの**地球規模の人類—倫理**が、国際的に、営々として構築されているということ。さらに、環境に対する教育は、エコ教育の主体としての態度を身につけるために、日常生活での態度を空気・水・土との関係で意識化できるようにすることに挑戦しているということ。そして最後に、関係の中心的な媒介力として、各人の手の届く場所にありかつ地球規模での生命の呼吸への経路そして息吹として、精神性へのポストモダンの訴えが始まっているということである。

こうした持続可能な未来を構築することは、大規模な地球規模の挑戦の前では微細な、取るに足りないような形で現れるのかもしれない。しかしわれわれにとって、それは自覚という希望を抱かせる目印である。「作られたものから作るものへと展開する…歴史的生命の世界では、作られたものはつくるものを産出するために作られている。いわば被造物は創造者が被造物の只中に生まれるように作られているのである」(西田、黒田による引用、2008、p6)。それは永遠の…持続する創造的な共—形成 (co-génération) という見慣れない結び目なのだろうか。

注 (本文中の引用では、翻訳書で確認できるものは利用したが、そうでないものもあることを断わっておく：訳者)

Bachelart Dominique, 2009, «Autobiographie environnementale: explication et Exploration de l'expérience écoformatrice» dans Guillaumin, Pesce, Denoyel coord.

Pratiques réflexives en formation. Ingéniosités et émergentes. Paris, L'Harmattan, p125-155.

Berque Augustin, 2000, *Ecoumène. Introduction à l'étude des milieux humains*, Paris, Belin. (オギュスタン・ベルク『風土学序説』中山 元訳、筑摩書房 2002)

Buber Martin, 1969, *JE et TU*, Paris Aubier. (マルティン・ブーバー『我と汝・対話』植田重雄訳 岩波文庫 1979)。

Kuroda Akinobu, 2008, «L'auto-formation de la vie dans le monde de la réalité historique., dans *Colloque de Cerisy*

2008 *Etre vers la vie.* (<http://www.ccic-cerisy.asso.fr/KurodaJp2008.pdf>)

Morin Edgar, 2004, *La méthode 6 Ethique*, Paris, Seuil.

Morin Edgar, 2002 «Au-de la de la globalisation et du développement, société-monde ou empire-monde» dans *Revue du Mauss, n 20, Quelle autre mondialisation* p43-53

Morin Edgar, 2001, *La méthodes 5 L'identité humaine*, Paris, Seuil (エドガール・モラン『方法5』大津真作訳 法政大学出版 2006)。

Morin Edgar, 1991, *La méthode 4, Les idées; Leur habitat, leur vie, leur mœurs, leur organisation*, Paris, Seuil. (同『方法4』同訳 法政大学出版 2001)

Pineau Gaston, 2000, *Temporalités en formation. Vers de nouveaux synchroniseurs*, Paris, Anthropos.

Pineau G., Bachelart D., Couceiro L., Gimonet J-C, Puig P. (coord.) 2009, *Alternatives socio-éducatives au Brésil. Expérience d'un maser international Formation et Développement Durable*, Paris, L'Harmattan.

〈資料2〉

持続可能な未来の構築のために実践と省察を結ぶ方法としてのライフヒストリー

ラニ＝ベル・マルチーヌ

人類は、何千年来、神が彼らに理解させようとしたあらゆることの中から、何かを学んだのだろうか。

(バネ・アンストゥラティ)

「育てる (nourrir)」というフランス語はラテン語の educare を起源にもち、「教える (éduquer)」という意味をもっている。ガイアの時代以来、「育む地球」というシンボルは、同時に「教える地球」というシンボルでもあったのだ。明白なことだが、このもつとも重要な二つの機能は人類が自ら始めた愚行によって、育てようとする力 (capacité nourrissante) を十分に教えられるもの (éducante) にすることができなければ、危うくなる。

これについてエチエンヌ・テット (緑のエコロジー調査委員会) は、こう述べている。「19世紀に提起された問題が、西欧の産業社会によって際限もなく大きく育てられ、身近な部分で、テクノロジーの脅威になっていることを誰も知らうとしない。そのことはずっと前から分かっていた。しかし何故、こうした理解がわれわれの政治の領域に浸透し、社会の発展の基本的な方向を変えるようにならないのだろう。」

現在地球が、その育てるという機能の悪化として提起している問題は、まさに人類が生み出し再び人類に跳ね返っているものな

のだ。さて、つい数ヶ月前にあった持続可能性に関する会議のロビーで、わたしは次のような文句を耳にした。「どうして、まだ生まれてきていない世代のことを、われわれが気にするのか」。ここには、われわれをいらだたせ、われわれに挑戦しているものの核心が、現れているのではなかろうか。

この挑戦に対して、時間性として作用するライフストーリー (récit de vie) は、どのような機能をもって、向き合おうとするのだろうか。ひとりの人間としてでは、われわれの人生は持続的なものではない。ライフヒストリー成人教育 (histoires de vie en formation) が、持続的な発達というパースペクティブの中に自らを自然に位置づけるのは、この避けることのできない断絶を埋めるためではなかろうか。それは集団的な筋立てを作り上げることによって、ひとりひとり個人の限界を超えて人間 (l'humanité) を結びつけ、不可避的で無限の断絶を越えて、歴史 (Histoire) と文化を結びつけるのではなかろうか。

1. 持続的になるという挑戦

言葉はまず未来にある

「…」「どのような子どもを、われわれは地球に差し向けるのか」
 ということを通して、教育者は、
 「どのような地球が、われわれの子どもに差し向けられるのか」
 という問いに、答えることになる。
 (パトリック・マターニュ)

このような展望のもとで、紙の上にかかれることを通して大地の上にかかれたにも等しいこの前提を遺産として受け止めながら、今日の子供たちはわれわれに対して、彼らがたどり着いたこの世界の状態について、そこにわれわれが何らかの責任を負っている世界の状態について、何を言おうとするのだろうか。

10歳のマリーが、彼女のライフストーリーを自由に振り返りながら、自ら最も大事なことから語っていることに、耳を傾けてみよう。

「人々は何をするのだろうか
 地球のために。
 地球は具合が悪い。
 わたしは、自分にうち克ちたい。
 本当は、最初に
 お金について考える代わりに、
 地球について考えなければいけないのに。
 たしかに、お金はもっと大事になるだろう。
 でもそれは、地球がもっと存在できたらだ。
 わたしは、考える。
 わたしは、他の人に話しかける。
 でも、誰も本気にしてくれない。
 わたしは、試みる。けれど…。
 それをするのは、本当は、わたしじゃない。
 それをするのは、むしろ両親だ。

10歳のわたしが…。

わたしは、そのときまで生きているかどうか、分からない (思わず涙ぐえ)。

どうしてかという、それはもう始まってしまったから。

わたしは、人々がそのときまで生きているかどうか、分からない。」(主語が「わたし」から「人々」に変わった。それはおそろく、わたし一人が関係者ではないことが分かって、安心したからだ)。

われわれは子供たちに、未来は開かれていると (同時に、閉じられていると) 話したことを、話した展望通りに実現してやれるのだろうか。彼らはわれわれよりも上手にゴミを選りわけし、一日に沢山の種類の果物と野菜を食べ、カロリーを抑える努力をする (モノがあふれる土地と環境で) ——たとえば彼らが、ハンバーグが好きで他の食べ物はお気に召さず、われわれも彼らにそれを作ってやり、またそうすることに慣れていたとしても…。

…しかし彼らの頭の中に、われわれは時代遅れの意識と適性によって、何をひき起こしているのだろうか。どのような成育。どのような教育。どのような未来への進言??? 自分からこの問題に向き合って、10歳のマリーは、自らを深く掘り下げようとした。マリーの人生には、なにも過失を犯した瞬間はない。それでもマリーは、耳を傾け自分を振り返った。そして自分を未来に投じた。われわれが彼女のすぐ近くに設けた標識どおりの、生命の境界——彼女はすでにそれと衝突しているのだが——に向かって…。

われわれが子供に対してと同様、世界に対して耳をふさいでいようと望んだとしたらば…。

言葉は過去に存在した¹⁾

以前、世界の中で起きた出来事の間には、
 何の関係もなかった。その後、
 出来事はそれぞれすべてが依存しあうようになった。
 (ポリビュオス 紀元前2世紀)

何人かの祖先—先人が永い時間の対岸から、われわれの意識の遅れを予言している。でも、全装置をかけるのに必要な部品はすでに存在するか、少なくとも自然に分かるようになっている。ある者はそれを行うか語っており、そうでなければ書いているのだから。

しかし人々がそのことに耳をふさぎ、目を背けようとするときは…。

わたしは、定刻より前に育みの地球が失われることがないよう、地球が残るよう気遣う、賢明でエコロジックな科学の言説を引き継ぎながら、慧眼の士の言葉を理解する機会を作ることに反対ではない。あの時代にあって、ルイ・マヤールという技術者の仕事を引き継ごうとしたのは、ひとりの女性、その時代のフランスの著名な女性作家であった。

そのテキストは、1863年に出版されている²⁾。その頃は、産業主義はまだ生まれたばかりで、まだ有害な効果を避けたり軽くしたりしようとしていた時代だった…。なかには、そのことを見抜いた人もいたのだ。彼らはそれを提起した。しかしわれわれは、何もなかった。あるいは、不十分だった。

われわれはその頃はブルボン島と呼ばれた、レユニオン島について考えようとしている³⁾。女性作家のジョルジュ・サンドは、この領地についての資料を集め、小説『インディアナ』としてそれを報告している。それが彼女の小説的な表現に頼っているものであるにはせよ、彼女は科学的にも明白な結論に立って、その考察の成果を公表した。

「ブルボン島を見ることは、私たちの若いころの夢だった。この計画が実現した歳——すぐれたガイドと過ごした懐かしい夢の中を散歩し返すこと——は、いまでも生き生きとした喜びだ(…)。マヤールとはここで出会った。海と火山、そして三番目の力たる、激しく冷酷な自然の表出と闘う人間の仕事(…)。

彼の注目は植民地が何たるかを示す、すべての事柄に及んでいる。地勢、海、気候、地質、生物、動物、農業、産業、行政、歴史、制度、財政、統計、芸術、慣習、伝記、公務など⁴⁾(…)。

誰もが、マイヤールが残したカフェや丁子、その他の有用な植物の栽培にとって不都合な事柄についての考察を、関心を持って読むことだろう。これらの植物は斜面に植えられ、必要な湿度が保たれれば、土壌を保持するのだ。無計画な開発によって——⁵⁾その結果に一人ひとり責任があるが——、芳しい香りが島を覆い同時に乾燥と洪水から守っていた、素晴らしい樹木は完璧に姿を消してしまった。恐ろしい台風がこの美しい森に甚大な被害をもたらした時には、その残骸が永い間堤防に猛威の跡として残され、そこに過ぎた時間に替わるべき新しい芽吹きが見られた。

今日では、誰も洪水が土壌を海に流し去ることを止めることはできず、乾期には水源は日陰を失って干上がり乾燥が広がっている。もしフランスが侵入する意思を持たなければ、あるいは植民者達が単純な金計算だけで自分の将来を考えなければ、われわれは昔の航海士がエデンと呼んで敬意を表した、この海の真珠を廃墟にし、もうじき放棄するであろうことが予見できただろう。それは人間の手によって枯渇させられ、傷つけられても、抑圧を跳ねのけ、やがて神の世界に戻っていくだろう。これがフランスのみならず他国にとっても、神の摂理である平衡原則を取違え地球に対する彼らの権利を濫用する人々にとっての、レッスンであることがやがてわかるだろう。

疑いもなく人間には、探検し開発する使命が与えられている。しかし、とはいっても彼らには未来を予見し節約して、自らの存在にとっての予防薬を自然の中から探し出そうとする知恵が、与えられていたはずである。森は彼らに、土の豊かさという尽きることのない貯水池として与えられており、大気の変異に対する防壁でもあった。人間はそれらすべての聖域を犯してしまった。先

祖たちよりずっと無分別、無知になるにつれ、彼らは斧を聖なる森の奥深くに打ち込んだ。アメリカでは、人間は生まれた原初のままにその植生を保ってきた、驚くほど豊かな土の与えてくれる原始の世界に、激しく襲いかかった。破壊の作業は、完了した。われわれは、疲れた土地が自ら反抗し気候が生命を拒否する日まで、小麦や砂糖や綿を求めるのだろう…。」

このテキストが描かれたのは、1863年であり⁶⁾、それを書いたのが女性であることを思い出してほしい…。

これに耳を傾けるということは、どういうことだろう。

この確言が持つ意味は、それが挑戦を示唆するということである。挑戦とは、人々がマリーの言葉を心に抱きつつ省察の中では会えなかったものの、確かに関わりをもつ普通のより若い世代に向けて、声(voix)を上げる——道(voie)を拓かないまでも⁷⁾——という活動計画のことである。

2. 物語の挑戦

「実際のところ問題とは、たとえそれが一つであるときでも、
過ぎ去る時間とそれに対する消極的な拒否との、
果てしない関わりである。」
(エリック・ミレ⁸⁾)

明日(若いマリーの言葉に代表される)を昨日(ジョルジュ・サンドの物語)に結びつけるリレーとして、どのように彼女の終末までの人生を考えたらいいのだろうか。人生の長さは限られていても、未知の人々が公平に与えられた時間の中で、終りがあつつも「持続的な」ものとして自分の発達を考え、自らを気遣うのと同様に次世代に手渡すことにも気を遣いながら、さらには彼ら自身も少しは持続できるように、その人生を真に占有することができるようにするには、どのような伴走が必要なのだろう。この運動はわれわれを、その時にはもう居ない未来に向かって導くのだが、だからと言ってわれわれは、質の探求を無視しなければならないというのだろうか。われわれは一瞬であれ、その空間に参画したという過去から解放されることはないのに。

ESD——持続する(durer)という困難な(dure)挑戦

死は、人生よりずっと永く続くという単純な理由において、
より注目されるべきである。
(マルク・デュギャン⁹⁾)

したがって定刻が来たとき、われわれが持続可能な発展を持続的なならざる全員が一致する意見として分かち合っていたとしても、救済よりも邪魔であることの方が多い慎重の原則を紐帯としていれば、年長者、証人、過去からの使者が担当すべき考察の中に一つの変化が生まれる。つまり、そこから彼らが恩恵を受け、彼らに権威と尊敬を授ける成熟という断絶が、しだいに若い者を老いさせ——または年老いたものを若者嫌いにする。逆説的なことに、

人生の延長と結びついた度重なる質の悪化が引き起こす、悪名高い弱さにとって代わられるのだ。

懸命にも年老いた者はその任を引き受け、成果を上げる。その多くは、時間の経過が彼らに及ぼす可視的なものであるが、それは退行という逆向きの進化、またはその身体と精神の間に生じる落差のことである。従って、どうしたらこの老いゆく者の考えを受容可能なものにし、喪失 (perte) と確かさ (certe) および記憶 (mémoire) または動性 (mobilité) から成る経験を、自ら残存はしても同一のものとしては残さない形で、残すことができるだろうか。

ところで人生は、人により 1 歳、10 歳、100 歳に至る一つの人生であるが、その質は過ぎる日々の量となんら比例しない。そして老化の過程は、人生の始まりから開始されその終焉までついてくる。到達できた年齢の烙印でしかない数字で人生を振り返ることは、それゆえ自らを忘却することであり、時間はこの冒険の仲間に姿を変えてしまう。

しかし別の人々 (「わたしの時間について」という表現で自分を語り始める人達) にとっては、彼らが生きている間であっても、時間はその外に跳び出すべき「彼らの時間」の上限に過ぎない。自分の時間を自分の時間として考察しなかったならば、彼らはどのような時間を生きているのだろうか。上限はことによると、ごく近くにあるかもしれない。そしてそれは、年齢や何かを実行する能力、休息や気分転換への権利の有無など、混乱した形で強調されている。

表現したいことを言うための言葉は、しばしば矛盾を含むと同時に手ごわい相手である。たとえば、フランス語で祖先についての話をするとき、「高齢者 (grand âge)」や「祖父母 (grand parent)」とはいうが、「小さな年寄り (petit vieux)」とは言わない (つけ足せば、「小さな若者」ともいわない) …。フランソワーズ・ベトゥルネは、老いについての程度の低い運命論と闘う必要を指摘している。老いはそれ自体が、持続性を表す一つの発展を意味するのである。つまり「人は、過去を取り戻すことはできないことを知るべきだ…。しかしそれを知っていれば、もう、それでいい」¹⁰⁾ のである。物語は、このようなシーソーたり得るのだろうか。

ルーシーからアンドレへ、そしてアルヴェールへ

それは、聞くことから生まれた物語でした。

(多和田洋子)

アンドレ・シェディッドの言うことに耳を傾けるならば、われわれの原祖先のルーシーは、投影された「人間性 (humanitude)」に向かって立ち上がり、人類の始まりの地点を見つけるために、はるか遠くの偶然から下降してくる、起こりそうもない未来から届く呼び声に応えたのである。

「私は、この呼び声がどこから立ち上って来るのか、知らない。

しかし、それは突然現れる。何度も何度も。

それは立ち消え、また私に向かってくる。

それは私を立ち上がらせ、しがみついてくる。

(…)

ついに、立った。

初めて、立った。

私は、自分の永い歩みを始める。

すべての人間に呼び掛ける歩みを。」¹²⁾

アルベール・ジャッカルが想像上のひ孫に、「まだ生まれてこない、お前に」という手紙を書いたとき¹³⁾、彼は、アンドレ・シェディッドが自らの姿勢を正そうとして、ルーシーが聴いた声に耳を傾けようとしたのと同じ世界からの声に、応えようとしたのだ。この呼び声は、人生の終末についての考えに打ちのめされながらも、クサノオウの花を目にしてベッドから肘掛椅子に体を移そうとするときの誰かにも、届いている。「語ってください。あなたが話すべきことに、わたしは興味があります」。そのとき現在は、過去をノスタルジーや苦痛としてではなく未来に役立つ源として、プレゼントを伴って蘇る。彼の人はそのとき、自分が人間としての尊厳をもち蘇生していることを、発見する。それはわれわれが、「語る人 (homo narrans)」という始まり (ヴェルナール・ヴィクトリー『人であること』¹⁴⁾ による)、つまりルーシーという原始の女性による始まりに続く位置に、居るという現実に戻すのである。

物語を生み出す力は、このように立ち上った人間の、創始者 (fondatrice) というわけではないものの基本的 (fondamentale) な特徴であり、その機能は記憶に残る痕跡を省察—交流を目的とした作業に置き換えることである。この機能によってわれわれは、自分の人生から出発して自分と他者のため、また自分と他者に関わりながら、過ぎ去った時間を超えて変化することができるのである。この機能は基本的なものであるために、人間としての形質を備えたものなら、どの事例においてもあらゆる時間の推移にも伴走し続ける。だからこの基本的な特徴的機能は、「全生涯にわたる」という表現に該当するが、それだけではなく、見つめようとする人生の上流に向かってても下流に向かってても開かれていることによって、両方の極限を超えるのである。

ライフストーリーが西欧において、人間科学に導入されるべく人々と文学の親密さの門を開いたのは、19世紀末のことであった¹⁵⁾。最初は、社会学的研究的パースペクティブにおいてであり (たとえばシカゴ学派)、さらに最近では前世紀の80年代以降の教育科学において、研究だけでなく教育的実践のパースペクティブとしてである (ガストン・ピノーの仕事を参照)。

さらに、われわれが見てきた「自ら」を語るという過程から、自分の物語に触発された人々が、物語の中に組み込んだ事象を超えるのとまったく同じように、自分の固有の時間をしばしば超えるということが、理解できるだろう。

語る

私が物語を介して時間を掘り下げる場合、するようになった区別を示すと、次の通りである¹⁶⁾。

- **系譜論的なライフヒストリー (L'histoire de vie généalogique)**：この場合には、特定の人々が、もちろん直接出会わなくても、自分の祖先の人生の意味の再構成を目指すことによって、自分を形成する。現在を語る過去、または過去を介して自らを語る現在。
- **世代論的なライフヒストリー (L'histoire de vie générationnelle)**：いくつでもいいが「ある歳」の誰かが、自分の人生を彼（彼女）の下世代に向けて残しておきたいと強く感じ、そうしたいと願う（または求められる）もの。既述したアルベール・ジャッカーの例。
- **生成的なライフヒストリー (L'histoire de vie générante)**：この場合には、現在において世代を超えた共一生産 (co-production) が行われ、上の引用句に示した多和田洋子の表現によれば、各世代は「聞く／語る」という相互作用の中で、もう一つの世代に呼び掛ける。このモデルは同様に、手紙の交換のような「交信」でもある。
- **世代間のライフヒストリー (L'histoire de vie générative)**：これは世代論的なライフヒストリーを補うものである。この場合、今度は子どもが人間に似た玩具や、バーチャルな空間への自己投影という方法を介して、物語を伝えようとするような行為を指す。女の子を例にとれば、未来の自分を予見する物語を生むのは、ママに自分を託す赤ちゃん人形である。

持続的な発展というパースペクティブにおいて、そして個人というはかない人間としての立場を超えるものとして、混じり合う幾世代にもわたる連鎖として、次の3つの初発段階の問題が検討されるべきだろう。

- **系譜論的なライフヒストリー**に関しては、多くの人々が一端、その職業生活を終えた退職の時から、系譜論的な探求に関わるための時間をもつという「恩恵」を得ることができる。でも、この分野に何の必要も感じないのであれば、彼らは無理矢理そうしようと急ぐ必要はない。
- **世代論的なライフヒストリー**は、上と同じ退職の時期に、要求として感じられる。もしそれが必要なことと感じられるのなら、その気持ちを持続できるように伴走したり——その過程は面倒が多く、うまくいかないことも多いだろうが——、その気持ちの評価したりすることが大切である。いずれにせよ、どっちつかずの状態から解放して、やろうとする気持ちを保てるように、彼（彼女）を落ち着かせることである。あるいは、たとえば発達の停滞のような、その人が抱えてきたトラウマが無くなるようにすることが求められる。ジャンヌ・カルメンが¹⁷⁾、その長寿の秘密として明らかにしていることを思い出してみよう。「わたしは人生の中の、いやな瞬間を忘れようとしてきた。わたしは思い出を選んできた。わたしは

嫌な思い出を耐え忍ぼうとはしなかった」。この話に従って経験を選びわけ、ともかく「すべてを語る」という原則を離れ、しかし回避や逃避はしないことである。どんな経験にもある、微妙な部分は避けるということは、まさに過去に目を向ける方法の一つなのである。目的は生みだされた事柄に、（改めて）働きかけることではない——それはどんなことをしても、変わるものではない¹⁸⁾。そうではなく、自分の人生の瞬間を物語に変え、不在になった現在に奥行きを与えることである。しかも語り手には、見かけや逃避を選んだり縮んだ現実の人生にその世界を限定したりしないで、そこに結果として可能な「未然 (pas encore)」に向かって更新される門が開かれ、拡大した空間からメリットを受けることができるようにすることである。それは、その人の物語を聴くことや読むことへの反応として生み出される、受容の側からのコミュニケーションに過ぎないのではなからうか…。

寝たきりの人にとって、現在おかれた状態に時間を限定せず人生全体の越しかたを振り返ることは、現実の中では忘れられ、まれにしか意識されなくても、ルーシーのように、ある局面から「立ち上がる」ことができることだ。さらに重要なことは、個人的な関係の中で話を聞いてもらうことではなく、さらに開かれた形で、自分の人生を聞いてもらうことである。たとえば、伝達手段が未発達だった時代の証言として、「話してちょうだい。携帯電話がなかった頃、あなたはどのように暮らしていたのか。水道がなかった頃は…」これが時間の断絶を超えた、世代から世代への繋がりである。

- **生成的なライフヒストリー**に関してでは、わたしは、参加者が書くための固有のモチーフを探す集団でのワークショップにおいて、たまたま、この種類のライフヒストリーを方式化する機会を持ったことがある。エディットは、彼女が生まれる前に亡くなった、ほとんど何も知らない祖父について、「知る」ことを願っていた。そこで彼女は、祖父あての手紙を書いた。「おじいちゃん。わたしはあなたのことを何も知りません。わたしはあなたに聞いてみたい」。しかしそのときは、他の参加者から、とても短いコメントがあっただけだった。でも次のセッションでは、彼女に返事が返ってきた。「わたしのかわいい孫へ。わたしはお前が手紙を書いてくれたことを、とても喜んでいるよ。でもわたしはお前よりも前に居たのだから、おまえはわたしがどんな人間だったかを少しは知っているはずだよ。でもわたしには、お前のことを知ることはできない。わたしはお前が生まれてくるかどうか、知ることはできなかったからね。そう、わたしはお前にわたしのことを話してやるよ。でもその前に、お前に自分のことを話してほしいな…」自分の子どもがいないエディットは、そのときまで自分の人生を書くということに踏ん切りがつかず、世代論的なライフヒストリーについても面と向かっては関心を寄せることをしなかったが、それまで届かなかった下流からの呼声を上流からの呼声へと切換えることによって、特に意識せずに自分の人生を書くことができるようになった。このように彼女にはちょっとした仕掛けをただけだったが、自分を物語るができるようになったのである。

驚く出来事はこれに留まらず、さらに、語りが単に一時的なものでなく社会的な関係をつなぐベクトルになることを、目撃することになった。グループの中に子どもと孫だけでなく、ひ孫もいるひとりの女性がいた。従って彼女は後続世代からの未来への呼びかけを強く受けとっていたのだが、同時に、それは孫たちの情報機器への関心と「検索エンジン」熱によって媒介されていた。エディットから祖父の名前を聞き、彼が役場の職員であり公表された統計資料を作っていたことを知った彼女は、孫たちの助けを借りてインターネットを使って、エディットが想像もしなかった方向から、この未知の、名の知られた祖父に関する情報を集めたのである。そして茶目気たつぷりに、次の週、エディットにそれを手渡さずに、彼女はそれを郵送した。つまりエディットは、本当に手紙で「返事」をもらったのであり、彼女の祖父との「通信」を続けることができたのである。このように生成された自分の物語が、先ほどのように彼女を生成させた祖父の物語を、生成したのである…。それ以来、わたしは生成的なライフヒストリーを、彼女の名前をとった「エディットの原理」という愛称で呼んでいる。

わたしが組織しアンドレ・ド・ペレッチと一緒に取り組んだワークショップで会った、大先輩の一人でわたしたちが称賛を贈りたいと考える、今度の5月25日で95歳を迎える、持続可能な発達を体現する生きた事例と言えるような方も、この最後のカテゴリーに入れることができる。この人場合には過去の再構築が、現実にかかれた未来に向かって変化していくことを見せてくれた。わたしの勘違いでなければ、日本では「このようなことは、もうあってはならない (plus jamais cela)」という展望の下で、学校に通うすべての子どもを過去の記憶が残る現場に連れて行き、「平和博物館」を訪ねるようにしているだけでなく、現在まで生き残った証人と彼らを出会わせいっしょに議論するようにしている（沖縄がその例だろう）。その子どもたちは、「サイン帳」に第一印象を書くよう指導され、さらに彼らは旅行記や資料集を作成する。この生き (vivante) 証人を通した (via) 対話を伴う過去の事実との出会いは、描写である点や、それがいまだに現在の問題であり、関係者が現存するうちは終わらないという点で、生成的ライフヒストリーと類似している。しかもこの出会いは場所との関係が深いという点で、フランスとは違う展開を示している。フランスでは、証人のほうが小学生に物語を聞かせるために学校という知の現場に出向いているのである（なぜなら、みんな学校にいるからだ）。

入所者が、全くかほとんど外に出ることのできない老人ホームに子どもらを連れて行って、情報と人との出会いに飢えている高齢者の耳元に、口を近づけて話すよう指導するときには、まず、われわれ自身がそのようにやってみせる。そうして初めてうまくいく。そして、物語が始まる…。

これら二者が見出す意味の関係は、全く相互的なものである。事実、子どもたちはいまある高齢者が生きてきた話を聴きたいと

いう欲求を持っている。それは直接の出会いによる、彼らの時代の生きた文化への道案内であり、「わたしの叔父さんが話してくれたことだが、そのまたお父さんは…」という魔法の言葉（『千夜一夜物語』のアリババのせりふ）が象徴的に開く物語を通して、その奥深さに指で触れ、「近接性 (proxémie)」を基に、その世界に慣れ親しむことである。それは子どもに、実況放送によって、一世紀半の記憶範囲を開く。そしてそこに、可能な未来に向かう途が穿たれる。それはわれわれの発展の持続性に、直接貢献する。これと同じ冒険に、時間の上では区切られる各世代が結集するのである。

アットマークまたは人生の終わりまで続く、
一生涯にわたる形成における不眠の時間…

永い永い人生の火を盗んでしまったことは、
高くつく…。わたしの見方とは異なるが、
荒廃した心象風景の広大さを悔しがっているピティエの見方によると、

T夫人は、しゃがれ声でこうささやいているという。
「そこにいるのよ。みんな元気で。
みんな生きている…。みんな自由に…、
そう信じなきゃ。でも、心配で…」。
彼女は怖がっている。

恐怖を表現するには、どれだけ勇気があるのか！」
（フランソワ・ベトゥルネ）

しかしこの活動は、昼の時間だけに限られない。すでにわれわれは、夜が一日の生活時間の半分であることを知っており、眠りが歳とともに細分されることを知っている。夜眠りたいという欲求は、70歳を超えると平均3～4時間叶えられるにすぎない（午後の昼寝で補われる時間を入れて）。なのに老人ホームでは、生活のリズムの改善に本気で注意を払っているのだろうか、まったくのところ（多くの場合、夕食の時間はとても早いのだ）。

ポーランドのエルズビエタ・ヴォズニエツカによる、高齢者たちの夜の行動についての研究は、まさに驚くべきものである。というのは、睡眠以外のこの自由なインフォーマルな時間は、しばしば睡眠薬への逃避をともなった苦しみ之源、あるいは昼の時間を補完する活動の領域らしいのだ。新しいテクノロジーがもたらす環境の中で、また自分でもそれをもつことができるようになった今、すでにそれになじんだ——とりわけ孫を介して——人々にとってはとくに、インターネットはひとつの資源になっている。

こうしてわれわれはこの可能性を、これまでに見てきた中で明らかになった事柄、特に世代交流的な関係と気づきという観点に、結び付けてみるができるようになる。アットマークは、この点で情報との出会いと交流の優れた紐帯である。若者は、パソコンを使いこなす知識をもっていることによって、支援者という役割をもつようになる。また高齢者は、自分が教育を受ける受講者の立場に立ちながら、そこにこれまでの経験をもちこむ。各世代

が、お互いがお互いに見出す必要性を介して、互いを刺激し合うようになる。そして互いが互いを評価し合い、それぞれの好奇心の在り方や現実への関心の持ち方に気づくようになる。これは、そこに持続性が担保される、現代の紐帯である。

「千夜一夜」のコントが描くテーマの一つは、命を保つということである。シェエラザードは自分の命を守るために、王に物語を聴く楽しみを教えながら、朝が来て続きを聞きたくてしょうがなくなるよう、話の最も面白いところで語りを止める瞬間を選んだのである。要するに物語が続くためには、シェエラザードの命が必要だったのである。つまり発展の持続性を保証するのは、**終わりのない言葉の力**ということではなかろうか。

夜が昼と同様のものであるとはいっても、もしこの人生の一部が——そこでは、過去は現在の中で、より慎重深くかつ静かに組み替え直される——、認識や知識の源、時間の発見という特別な形をとる記憶の使用に適しているならば、夜は何時であっても開発されるべきだろう。それは人類の歩みとしてのわれわれの発展が持続的であるためには、欠かすことのできない事柄である。こうした意味で、われわれは「収穫 (recueil)」が消滅に対抗する、持続的な発展の一部であるといえることができるだろう。

語ろう、さらに…。

注

- 1) Cf. « Réappropriation le monde », Martine Lani-Bayle, Chemins de formation n° 12-13, Téraèdre 2008, pp. 231-237.
- 2) Georges Sand, « Notes sur l'île de la Réunion (Bourbon) », in La Revue des Deux mondes, 1863.
- 3) 1946年からフランスの海外県。アフリカの東南、マダガスカルから700キロの大西洋上にある。2011年には多様な人種からなる80万人が暮らすこの島は、1710年から植民地であった。ここでは、1848年に奴隷制が廃止された（統合主義に引き継がれた）。引用したこのテキストは、奴隷制の正式な廃止をあまり反映していないことに注意する必要がある。
- 4) ルイ・マヤールは、言うまでもなく、エドガール・モランを読んだことがない（ジョルジュ・サンドも同様だが…）。『コンプレックス』。
- 5) 誰がいつから、モランが言う「絶対の知」をもつのだろうか。
- 6) マヤールの土地の状況報告が出て一年が経つか経たないうちに、島では砂糖産業が危機に瀕し始め、深刻な経済危機が引き起こされたことに注意しよう（remarque d'Olivier Soufflet, La route des Indes I. Voyage en Afrique australe, à Madagascar et la Réunion, Artisan reporter 2004）。
- 7) エドガール・モランの最新著 « Pour l'avenir de l'humanité », Fayard 2011. のサブタイトルより。
- 8) L'Antiracontage, マルチヌ・ラニ＝ベルと共著。2011年出版予定。
- 9) En bas les nuages, Folio n° 5108, 2009, p. 263.
- 10) Le Journal des psychologues « A l'écoute du vieillisse-

ment », avril 2008, p. 33.

- 11) 1974年にエジプトで発見されたオーストラロピテクスの頭蓋骨は、300万年前までさかのぼる。それ以来、ルーシーはわれわれの直接の祖先の傍系に属する、われわれの祖先から多様に枝分かれした、係累の一部であることが明らかになっている。さらに2001年には、チャド・ツマエ（「命の希望」の意）での発見から、ヒト科の起源は700万年前まで、遡るようになっている。まさにかくも永い、持続的な発展ではある。
- 12) In Lucy, la femme verticale, Flammarion 1998.
- 13) Calmann-Lévy 2000.
- 14) In Langages, 146 (2002), pages 112-125.
- 15) 他方で、ここでの心理学または精神分析での目的、つまりライフストーリーの受け止め方と使われ方は、療法での位置づけにおけるそれとは異なっている。
- 16) Cf. Martine Lani-Bayle Les Secrets de famille, la transmission de génération en génération, Odile Jacob 2007.
- 17) フランスの元女性首席司祭。120歳まで生きた。
- 18) しかし物語はその表現に関しては、働きかけることができる。たとえば、ボリス・シリルニクが「レジリエンス（回復力）」と呼んだ、現すことや作動させること、あるいはショックや深刻なトラウマによって中断させられた発達を取り戻すことなど。

〈資料3〉

ライフヒストリーの実践 ——個人から集団へ

ナディア・ビール

2001年に、ナント大学のマルチヌ・ラニ＝ベルは、「ライフヒストリー教育 (DU HIVIF)」の大学教育資格を創設した。外国においてと同様フランスでもユニークなこの資格は、支援、教育訓練、研究のいずれかの場で、学生に実践的であると同様、理論的な内容で伝記的手法に関する修士の資格を付与しようとするものであった。

このコースはライフヒストリーの伴走者になろうとする、職業人ないしは研究者を対象にし、それぞれの実践を基にした仕上げを行うものであった。

基礎理論とその展開（コミットメント）、そして応用からなる3つの単位（研究および実践による）を結びつける2年間の教育（全部で230時間）によって、学生にはそのライフヒストリーに関する学習成果を証明してみせる条件が与えられた。コミットメントの単位には、「国際成人教育ライフヒストリー研究協議会（ASIHV-IF : Association Internationale d'Histoires de vie en Formation）」の「憲章」に基づいた、この教育に必要な中核的な内容が配置されていた。受講者には、誰かにやらせる前に自分が人生に学ぶという方法を、自ら経験することが求められた。

私自身も、2002年から2004年にかけてこのコースを受講した後、未来の初等教育の先生とともに、伝記的なアプローチを方法とした博士論文に至る研究を始めることができた。

2006年から、マルチヌ・ラニ＝ベルは私に、応用の単位に関する授業を手伝わせるようになった。本報告は私が加わった、この継続教育での経験に基づいたものである。

コミットメントの単位

この単位では、受講者は自らの受講計画に従って自分の個人の人生を物語り、それを社会化することによって、ライフヒストリーの一連の展開過程の意味を理解することが求められた。ここでは自分の人生を語るだけでなく、人生を構成する出来事について省察する作業が求められた。それは省察と対象化、解体と再構築、連結と切断を繰り返すことによって、人生の経験を分析し総合するという経験をするためであった。

この過程を経験しようとする者は、**他者とともに自分について**のワークに取り組む。最初の**自分について**のワークは、情動的な記憶を基に実際の経験や感じたことを、確かめることから始まる。目的は同じ出来事をもう一度体験することではなく、経験に結び付いた体験の意味を再び検討しなおす機会を得ることである。この過程が予定しているのは、あらかじめ過去の経験の中に再び浸り、経験に結び付いた情動とともに経験をとらえ返すということである。

二番目には、参加者は「**メタ**」の位置に入り込むよう求められるが、それは彼らが自分の語った物語から外れて、距離を置くためである。そのとき、ひとりひとは自分が語った物語を他人の語ったものとして扱い、それについて集団の助けを得ながら、どのようなことが取り上げられ、どのような過去を分かち持っているのかという事柄について考察を深める。

そのときには、個人の歴史と彼が生きてきた社会的、歴史的条件との間に、関係が結ばれる。誰も自分の小さな「歴史」の中に大きな「歴史」が刷り込まれることを、まねがれることはできないからだ。特殊が一般に結合され、個別が普遍に結び付けられるように、各人の物語はそれぞれの仕方、あらゆる社会的世界を彼らにもたらし、個別の歴史の中に「**個別的な普遍**」を生じさせるのである。

このようなプロセスは単独で進むのではない。そのようなものは自伝とも言えないし伝記ともいえない。この過程は生来、**他者との**交流の中で展開するものである。各人は他者と自分を関係付け、他者からの意味付けを予定しながら自分を開示する。物語は自己に向かうが、同時に集団にも支援者にも向けられる。つまりそれは、相互交流的な空間の中で展開するのである。ライフヒストリーという方法から生まれる変化は、相互交流の産物なのである。というのは、物語が呼びかけを生むからである。共同の意味構築 (co-construction) が行われ、物語との関わりから意見が生まれ、はっきりとした共鳴がこだまとなって返ってくる。**意味**の所有者は誰でもないが、ひとりひとりが出来事に結びついた意味を発見し、自分の中で起きていることが、他の人の場合にはどのように起きているのかを、理解しようと試みるようになる。

契約の必要

各人がどのような秘密の中にでも入り込めるようになるには、出会いの条件が保障されなければならない。軽はずみな発言や粗野な解釈、決めつけによる暴力があってはならない。語りに対する各人の意見表明や反応は、何が語られているかを明らかにするための提案および仮説であり、解明や解釈への願いであるから、すべては信頼と相互の尊敬の中で進められなければならない。各人ができるだけ自由に自分を表現することができるようにするには、秘密保持（実践の過程で語られたことは、外での論議の材料にはならない）と物語の利用（各書き手自身が書かれたものの所有者である）についての、はっきりとした契約条項が作られるべきである。

しかもこうした事情の下で、ライフヒストリーによる人間形成が重視されるときには、人生の出来事が全体として姿を見せる。だからその意味は、自然に実存的なものになる。同様に、各人がこの過程に踏み込むかどうかは、真に本人の選択に依らなければならない。それは自発的以外には行われようのない事柄であり、本人だけが自分の人生の意味のある瞬間を見つけることができるのである。

このような理由から、取組みの過程での約束を定める条項は、参加者の**自発性**に基づく。自発性が本物でありうわべだけのものにならないためには、取組みの前に、参加希望者と伴走者の間で話し合いを持つ必要がある。参加者が「事情を知り」、できるだけ自分自身で判断することができるようにするためには、このような配慮をすることが極めて重要なのである。それでも、各人がどの程度まで個人的な話をすべきかどうか、前もって判断することが難しいために、この取組みに入り込むかどうか踏ん切りをつけるのは、難しいままだろう。各参加者には、**始まった後**でも、この取組みから離脱する可能性を開いておくことも大事だろう。

二番目に自己に関するワークにおいて注意しなければならない規則は、集団の前でどこまで話すかを決めるのは**参加者自身**でなければならないということである。ワークの過程で物語が社会化される瞬間は、書き手の自己イメージによっている。それは彼らに、自分をどこまで見せたいと考えるかという、問いとして跳ね返る。これは自分に対してと同様、他人に対して注意を払うことを求める。従って、自分の人生を語るように求められる過程でリスクを感じる参加者には、自分の書いたものを社会化しないという選択も可能性として残されるべきである。何でも話せば良いということではなく、語り手が選んだ人生の瞬間についての解釈を投げかけることによって、他の参加者もそれに加わって自分の意見を言いたくなるようにすることが必要である。

開示された経験の中に現れるあらゆる局面が、意味の構築と集団的な合意形成の対象となる。また同時に、これらの瞬間の意味は支援者自身の中にも現れる。これが、このワークに込められた方法的意味を知る糸口である。

だから、参加者が意味発見の過程にいつでも実際に参加することができるように、形成のワークは契約の締結から始めるのであ

る。

参加者と伴走者の間の明確な契約が、義務論上必要であり基本になる。それは形成の過程全体を決定づけ、集団の中での各人の安全を保証するからである。すべての形成の過程は多少ともこのような予備的な段階をはっきりさせるべきである。逆に伝記的なワークは、一定の慎重さと安全を伴う個別化された過程として進む。このことも、取組みの開始からはっきり提示されているほうが良い。

契約がそこにいるすべての当事者によって一回承認されれば、各人の形成のライフストーリーのワークの開始である。

形成への支援、または自らの歴史に入り込む世界

意味を発見する作業は、参加者が自らの歴史に入りこむための連続したきっかけづくりという、形成への支援として展開するが、その支援は彼らが、自分の歴史を少しずつ形にすることができるように配慮される。このような参加者を自分の歴史へと導くあり方は、単純な道具や「既製品 (prêt-à-former)」などというのではなく、支援者自身がすでに自ら経験してみたことのあるアプローチの方法であり、導き方の背景にある理論的な課題との関係を持っている。単独では歴史を作る過程にはならないため、使われ方そのものは大した意味を持たないのである。

それぞれの支援は、以下に示すのと類似のプロセスを経て展開する。

意味構築の事例

…という自己の意味は…

新しい集団が出来上がるときに最初に見られることは、全体の動きの中で一人ひとりが自分について考え出し、集団の他のメンバーを知ろうとし始めることである。この時しばしば使われる方法が、自分の名前の源を訊ねるワークである。

私の名前は何か？ 誰がこの名前を選んだのか？ それは、どのような理由からか？ 自分はこの名前とともに、どのように生きてきたのか？

支援者は各人が自分のプレゼンテーションをするための支援を口頭で行い、各人が語りによって自己の探求を開始するまでの準備に15分をかける。この書くという段階は、記録されリストにもチェックされなければならない。場合によれば、この段階で文字を使いながら、図を描いてもらうことも可能である。

話そうとする思い出をはっきりさせようとするこの最初のワークが終わった後で、参加者は口頭でグループのメンバーに対して、その成果を発表する。各人のプレゼンテーションに続けて、希望する次の人が、前の語り手が提供したテキストに対する応答として、自分の経験を語る。

こうして共同の物語作りが始まる。この過程では、書き手は自分が最初に提示しようとした事柄を深めるための手掛かりを、集団から得る。自分自身との出会いが、選択肢についての質問や同類の人々からの反応と出会うことによって、自ずと豊かなものになっていく。集団もまた、このようなさまざまな意見交換の中で、全体として豊かになっていく。

すべての参加者が自分のテキストを報告し終わったら、この過程で新たに想起されたことをさらにはっきりさせるために、自らを振り返ることに取り組む。大したことはないと思っていなくても、自分の名前を確かめるワークは参加者に家族の歴史を思い出させ、アイデンティティの構築に結び付く。その上、大きな「歴史」が個人の歴史の中に紛れ込んでいることが、明らかになってくる。たとえば社会階層の影響や、時代との結び付き、命名に関する宗教的な意味、地域や文化的な伝統などが見えてくるのである。

他者に向かっては…

グループと一緒にワークを続けるうちに、かなりの参加者から、このような最初の積極的な意味発見の作業から、さらに深めてみたいという希望が表明されるようになる。そしてセッションとセッションの間に、参加者は両親や友人、拡大家族を、自分の名前の選択に関わる源泉として探求するようになる。各々は、どのようにして自分は上記の関係の中に組み込まれるようになったのかを理解し、自分が生まれるより以前に存在した、様々な事柄との関係で自分を見るようになる。自分に関わる、どのような選択があったのかを理解し、自分の経てきた人生の軌行きを知るようになるのである。

この作業は、同様に二つの運動を呼び起こす。一つは参加者が改めて意識化する、帰属や受容の跡についての認識という運動である。これは各人に、自らの人生を演じる主役としての選択や、自己確認の可能性を同時に与える。それは自分に先行する事項を汲み取ることによって、自分が受け止めたいと考えることや「自由な主体——意識的な主体をつくるという意味で——」としての自己確認を可能にする事柄を、自分で決めることを可能にするのである。

要するにショックを受けながら、参加者のある者は自分で他の名前を選ぶようになった理由を開示したり、ある者は長い間受け入れてきた姓をもう受け入れないと決心するに至った理由を、集団に対して開示したりするようになる。

こうした自覚化の過程における、**自分に対して**開かれた可能性の先に、各人が自分の跡をたどった途が他人のそれと交錯しながら、他人のたどった途もまた検討の対象になるようになる。伝記を書こうとする過程は、相違と他性 (altérité) を受け入れる力を付与するのである。それは「私」という表記を「私たち」という表記に持ち込む。その理由は、自分固有の歴史を理解しようとする過程で、彼／彼女は自然に他者の歴史を理解するようになるからである。こうして個人の物語は集団的なものになり、独自であると同時に他者と類似した、すべての者から受け入れられるものになるのである。

関係を生みだす複数の歴史

このようにしっかり組み込まれた、ダイナミックで相互作用的な過程が進んでいくうちに、参加者は形成の過程全体にわたって作用する様々な支援をうけ、自己と他者についての二重理解という経験をすることができる。人生の起伏や子供時代からの居住地の地図、多少とも各人が持続的に住んだことがある国や地域などの地図などの導きの手を経て、個人の人生の様々な側面が確かめられるようになる。他人のライフヒストリーを読む者もまた、取り上げられた人生や映画、シャンソンなどによって異なる時代に向き合うことになり、水や土地などのような諸要素と自分とを、そして他人の出会いと自分とを関係づけるようになる。

このようにして生まれる物語はグループの中で共有され、そこに反響が生まれる。各人はそこで、人間であれ自然であれ、自分を取り巻く世界との関係を意識化し、どうしてそれらが様々な関係性の中で結ばれているかを知るようになる。語りを聞くうちに、人々はそこに結び付きの赤い糸が通っていることや、循環、断絶、連続、反復があることを知る。それぞれのコメントが意味の束になり、一人の人間とその他の人間を動かす価値が意識されるようになり、各人の経験はみんなが共有する文化へと姿を変える。

こうして、この実践によって自己形成する人は、単独ではなくなる。彼は外から提示されたモデルに従って、それをモデルに自己の自律を果たし、集団への帰属意識を確立する。他者が存在するために自分から出発することが必要なものであり、そのことの見返りに得るのはより大きくなった自己であり、共にかつ持続的に生きる新しい生き方である。それはわれわれの祖先や同時代の人々、これから生まれてくる者たちとの関係に他ならない。